

客観性なき実在論

—近年の道徳心理学における感情主義の検討—

永守 伸年

はじめに

感情主義とはその広義において、われわれが道徳的判断を下しているときに感情が決定的な役割を担っていることを主張する立場である。この立場はホプズからヒュームを経由する哲学的伝統をもっており、二十世紀以降の英米圏の倫理学では、主にメタ倫理学とよばれる領域において活発に検討されてきた([Nichols, 2008])。具体的に述べるならば、感情主義はメタ倫理学において道徳的判断が信念であることを否定する非認知主義、あるいは非認知主義の一種態としての情動主義といった立場によって整理されつつその内実を問われてきたのである。そして近年、あらたに経験科学の技術的・理論的進展に支えられることによって、感情主義は伝統的な哲学的権威としての理性主義との対立の図式において注目をあつめている。われわれの道徳的判断の核心は何らかの感情的状態にあるのか、それとも理性的能力にあるのか——この問いは心理学や神経科学といったさまざまな研究領域にまたがりつつ、現在さかんに検討されているトピックのひとつである。

ただし、当然のことながら感情主義はこのような理性主義との対立において単純にとらえられる立場ではない。注意したいのは、上述のような経験科学の

知見が理性主義のオルタナティブとして感情主義を積極的におしすすめながら、他方では感情主義とよばれる立場の内部にも少なからぬ係争点をもたらしていることである。そのひとつは、感情主義における理性主義と反理性主義の対立ともいうべき事態に認められる。たとえば「新感情主義(neo-sentimentalism)」の提唱者は道徳的判断において感情が規範的に認証されなければならないことを主張するが、「シンプルな感情主義(simple-sentimentalism)」はそのような「メタ認知的な構図」を認めない([Jones, 2006])。この対立の背景には方法論上の違いも指摘できる。通常、メタ倫理学における感情主義が道徳的判断における感情の役割を意味論的アプローチによって主張するのにたいし、「シンプルな感情主義者」はむしろ「意味論よりは心理学に大きく依拠したアプローチをとることになる」([Nichols, 2008])。いずれにせよ興味深いのは、そしていささか奇妙にも思われるのは、しばしばこのような違いが肘掛椅子から立ちあがろうとしない「哲学的感情主義者」と、実験哲学に飛びこんでゆく「自然主義的感情主義者」の対比において理解されていることである。

このように単純化された構図を乗り越えようとする試みとして、本論はジェシー・プリンツに注目したい。プリンツは[Prinz, 2002]、[Prinz, 2004]、[Prinz, 2007]の三部作において独自の感情主義を主張しており、とりわけ 2007 年の著作『道徳の情動的構成』では、いわゆる「自然主義的感情主義」と「哲学的感情主義」のいずれにも肩入れしないようなアイデアを提示している。そのアイデアの内容をおおまかに整理するならば、プリンツは(a)道徳的判断における感情の決定的影響を示唆する科学的知見を重視し、(b)それらの経験的事実をもつ

ともうまく説明できる理論としてメタ倫理学における「感受性理論(sensibility theory)」を採用する。このような枠組みにあつて、われわれの感情的状態は情動(emotion)と感情(sentiment)という二つの観点から説明される。すなわち、身体的な知覚としての情動は心理学的メカニズムをめぐる経験的探求に接続しつつ、情動の「傾向性(disposition)」としての感情が道徳的性質を表象すると想定されることで、プリンツの感情主義は道徳的实在論をふくむメタ倫理学上の成果も継承することになる。結論を先取りすると、この見取図から最終的に導かれるのは道徳的主観主義であり、ここから客観主義的な規範理論が退けられる。

本論はこうしたプリンツの感情主義を理解するために、[Prinz, 2006]、[Prinz, 2007]を中心として展開されている議論を再構成しつつ、これを認識論的感情主義(第一節)、形而上学的感情主義(第二節)、主観主義(第三節)という三つの側面に便宜的に区別して考察していきたい。すでに上の概略からも明らかなように、プリンツはメタ倫理学と自然科学の知見の双方を取り入れ、いわば両陣営の「いいとこどり」をもくろむ仕方で感情主義をくみたてている。そして本論の目的は、この「いいとこどり」をめぐるプリンツの哲学的方法を詳細に検討しつつ(それはマクダウェルやウィギンズらの強い影響下にある)、感情主義をとりまく近年の学問諸領域の成果(それは人類学から認知心理学、神経科学に至るまできわめて多岐にわたっている)を概観することにある。

1. 認識論的感情主義

1.1 経験的事実は感情主義を支持している

さしあたりプリンツは自身の感情主義を二つの側面から区別している。「認識論的感情主義(epistemic sentimentalism)」と「形而上学的感情主義(metaphysical sentimentalism)」という側面である。まずは前者を考察することから始めることにしたい。おおまかに述べるならば、認識論的感情主義とは道徳的概念と感情的反応のあいだに本質的な結びつきを認める立場である。たしかにわれわれは「よい」とか「悪い」といった道徳的概念を用いて道徳的判断を下すとき、多くの場合、自分が感情的にアツくなっているのを知っている。認識論的感情主義はこのような考えをさらにおすすすめ、道徳的概念と感情のあいだにより強固な結びつきを主張することになる。周知のように、この手の主張は感情をめぐる心理学的探求によって、とりわけ近年では神経科学の技術的進展によって支えられ、感情主義者に強い影響力を及ぼしてきた。そしてプリンツもまた、たとえばハイト、ニコルス、グリーン、スロートらと同様にこれら経験科学の成果を積極的に取りいれようとする([Haidt et al. 2008], [Nichols, 2008], [Greene, 2008], [Slote, 2010])。以下、本論はプリンツにしたがって経験科学の成果を三つの段階に区別しながら紹介し、その上で、これらの知見が認識論的感情主義において果たす役割と、その限界について述べる。

情動と道徳的判断は同時に発生している

ひとつめの段階は、情動と道徳的が同時に発生している(co-occur)ことを示す

ものである。このことは認識論的感情主義にとっては比較的弱い主張であるが、近年の脳機能イメージング研究による貢献が期待できる領域でもある。まずはもっとも単純な研究のひとつとしてモルらの実験を挙げてみよう。被験者に「石は水から成り立っている」といった事実的言明と「必要に迫られれば決まりを破るべきだ」といった道徳的言明を評価する課題を与え、その際の脳状態をfMRI画像によって観察する。すると、二種類の言明の評価にあたって異なった脳の部位が活性化していたのみならず、道徳的言明に際しては情動的反応と連合している部位(両半球の前頭極皮質ならびに内側前頭回)の賦活が観察された([Moll, et al. 2003])。また、脳神経倫理学において現在もっともよく知られている研究は道徳的ジレンマをめぐるfMRI実験だろう。たとえばその主導者のひとりであるグリーンはさまざまな道徳的ジレンマを被験者に提示し、その際の被験者の脳をfMRIによって測定した。すると「歩道橋のジレンマ」のようなパーソナルなジレンマに直面したとき、やはり感情に関わる部位(後帯状回や内側前頭回)の賦活が観察されたという([Greene et al. 2001])。しかし、グリーンが脳機能イメージング研究を手がかりに規範倫理(とりわけ義務論)にたいする挑戦的議論に踏みだしているのにたいし([Greene, 2008])、プリンツの態度は抑制的である。なぜなら「脳のスキャン画像は[情動と道徳的判断の同時生起という]前理論的なわれわれの直観を経験的に裏付けてくれるに過ぎ」ず、感情主義は両者にそれ以上の結びつきを主張しているからである([Prinz, 2006], p.31)。

情動は道徳的判断に影響を与えている

続いてプリンツが紹介しているのは、情動と道徳的判断がたんに同時生起しているだけでなく、前者が後者に影響を与えていることを示唆する研究である。たとえば、ハイトらは「フランクの飼い犬が自宅前で車に轢き殺されてしまった。するとフランクは犬の身体を細切れにして食べてしまった」という劇のシナリオを被験者に読ませ、シナリオで記述された行為の悪さをランク付けさせた。ただし、被験者の半数はシナリオをきれいな机の上で読み、半数は散らかりほうだいの汚い机の上で読む。すると、後者のグループの被験者は前者のグループよりもシナリオで描かれた行為を悪いものと評価する傾向にあった(Schnall, et al. 2008)。また、「しばしば(often)」という言葉をきくと怒りの情動が喚起されるよう被験者に催眠をかけた実験では、この言葉を含む仕方で記述された行為にかんして否定的な道徳的判断が下される傾向にあることも示されている([Wheatley, et al. 2005])。さらに「相互の同意のもとになされた近親相姦はやはり悪い」という信念を正当化するよう被験者に要請した実験もある。ハイトらは、この実験に際して被験者が与えたすべての正当化を覆すような返答を繰り返した(たとえば「近親間の性交渉は障害児の出産につながる」という正当化をおこなった場合、「避妊すればよい」と返答した)。すると対話が進むうちに、最終的に被験者の多数が「近親相姦は嫌悪感をもよおすから悪いのだ」と返答したという([Haidt, et al. in preparation])。プリンツはとりわけハイトらの研究に注意をうながし、これらの実験はわれわれがある状況や行為について否定的な情動を持っているだけで、それらを道徳的に悪いものとみなしうる可能性を示唆していると主張する。

道徳的判断にとって情動は必要条件である

しかし、かりにハイトらの実験を額面どおり受けいれたとしても、そこから帰結する感情主義はそれほど強い立場ではない。なぜなら、道徳的判断にとって情動が十分条件であることを認めたところで、情動以外の要素、たとえば高度に認知的な要素が道徳的判断の必要条件である可能性はなお排除されていないからである。そこで、プリンツは最後の段階として「道徳的判断が生じるためには情動が必要条件である」という「必要性テーゼ」まで提示しようとする。そのためにまず手がかりを与えてくれるのは発達心理学的な観点からなされた実験である。たとえばホフマンの研究にしたがうならば、親は道徳的規則を子に教えこむにあたって(1)脅しによって子供に恐怖の情動を喚起させ(「今度やらかしたら罰を与えるからね」)、(2)子供が他人にくわえた危害に注意を促すことによって苦痛の情動を喚起させ(「みなさい、あんたが弟を泣かせたんだよ」)、(3)愛情の撤回によって悲しみの情動を喚起させる(「そんなことしたら、もう遊んであげないからね」)という技術を用いているという([Hoffman, 1983])。また、プリンツによれば、「必要性テーゼ」にとってもっとも示唆的な研究はサイコパスにかんする実験である。周知のように、サイコパスは恐れや悲しみといった否定的な情動を欠いており、これらの情動を他人から読みとることに困難を抱えている[Blair et al. 2001, 2002]。なるほどサイコパスは情動の欠損をのぞいては十分な認知能力を備えており、一見すると彼らは道徳性を理解して善悪の判断を下しているようにも思われるかもしれない。しかしブレアらの研

究によれば、サイコパスは道徳的な問題を慣習的な問題と区別することができず、たとえ「悪い」「不当だ」といった言葉を使用できたとしても、その内実(import)を理解してはいないという([Blair, 1995])。プリンツ自身の表現を借りるならば、サイコパスに認められるのは「リップサービス・モラルティ」に過ぎないということになる。そしてこのような議論は、「道徳的判断を下す能力を獲得するために情動が発達的な必要性をもっていることを示唆しているのである」([Prinz, 2006], p.32)。

1.2 経験的事実は感情主義を正当化するのか

もちろん、上述のいかなる実験も認識論的感情主義を正当化したり、あるいは何らかの理性主義的立場を論駁したりするだけの力を持っていない。このことは紹介されている実験のほとんどが、せいぜい道徳的判断と情動の因果的な影響関係を示唆するにとどまっていることから明らかだろう。たとえ将来的にこのような影響関係が確証されたとしても(つまり情動が道徳的判断を因果的に生じさせているか、道徳的判断が情動を因果的に生じさせているかが確証されたとしても)、われわれは道徳的判断の正当化において理性的能力が必要とされることを主張することによってなお強固な理性主義に立つこともできる。認識論的感情主義が「道徳的概念と感情的反応のあいだの本質的な結びつき」を主張するかぎり、それが上述のような心理学的事実によってのみ正当化される見込みはないのである。そしてこの点についてのプリンツの態度は、じじつ抑制的なものと言ってよい。プリンツによれば、「わたしがこれまで論じてきた

経験的証拠は、いかなるものであれ道徳的判断にかんする何らかの理論に論証的議論を与えることはできない」。むしろプリンツがここで主張しているのは、認識論的感情主義が「他の立場よりも[経験的証拠にたいして]すぐれた説明を提示できることに過ぎない」([Prinz, 2006], p.33)]。

しかし、だからといって認識論的感情主義をすぐに受け入れることはできない。というのも、この立場はその説明能力においてもいくつか疑わしい点を抱えているからである。プリンツはそのひとつに「冷めた(dispassionately)道徳的判断」の問題を挙げている。たしかに、われわれは道徳的判断を下しているとき心のなかにアツい感情の気配を感じることがある。だがつねに感じているとは思えないし、感じていなければ道徳的判断を下すことができないとも思えない。プリンツはこのような問いにたいして以下の二つ観点から返答する。第一に、道徳的判断はそれが表出している感情がたとえ現在の情動をあらわすものではなかったとしても、やはり感情を表出する判断とみなされる。たとえばわたしは道徳的判断「性差別は悪い」を激怒の感情を経験することなく下しうるが、性差別にまったく怒ったことがなければこの判断はたんなるリップサービスとみなされるだろう。それはコルトレーンに興奮したことがないのに「おれは『至上の愛』を愛している」と述べるのと同様である。つまり、たしかに道徳的判断は冷めたかたちで下されうるが、それでも何らかの仕方で情動に寄生して(parasitic on)いなければならないのである。

第二に、たしかにわれわれは冷めたかたちで道徳的判断を他人に帰属させることができるかもしれない。たとえば人類学の研究者はある儀式を観察しつつ

「首狩り族は人々が首を刈るべきだと信じている」という結論を冷めたままに導き出す。ただし、研究者は首狩り族が首を刈るという責務(obligation)のもとにあると結論づけるのみであって、首狩り族が首を刈るべき(ought to)だと述べているのではないことに注意したい。われわれは is から obligation を引き出すことはできても、ought to を引き出すことはできない。そしてしばしば外在主義者が引き合いに出すサイコパスは、まさに人類学者が首狩り族の道徳性について判断を下すような仕方でも道徳的概念に言及していると考えられる。道徳性をめぐるこのような言及は、決してその道徳性にたいする理解とは言えまい。したがってプリンツは次のように結論を下す。「われわれは道徳について冷めた判断を下すことはできても、冷めた道徳的判断を下すことはできないのである」([Prinz, 2006], p.38)。

以上の議論をまとめたい。本論はプリンツの感情主義のひとつの側面として認識論的感情主義を検討した。それは道徳的概念と感情的反応のあいだに本質的な結びつきを認める主張である。プリンツによれば、この立場は道徳的概念と感情的反応の結びつきを示唆するさまざまな経験的事実をうまく説明することができる。そして「冷めた道徳的判断」のような事例でさえ、必ずしも認識論的感情主義の説明能力を損なうものにはならない。

2. 形而上学的感情主義

2.1 感受性理論とシンプルな感情主義

続いて検討されるのはプリンツの感情主義のもうひとつの側面、いわゆる「形

而上学的感情主義」である。こちらは道徳的性質と感情的反応のあいだの本質的な結びつきを主張する。この主張の内実を明らかにするために、プリンツはさしあたり道徳的性質が反応依存的である(response-dependent)という立場にコミットする。つまり、「よいもの」とか「わるいもの」にかんする道徳的判断はわれわれの感情的反応から独立に理解することはできないという立場である。ただしジョーンズの指摘するように、たとえ反応依存性テーゼを受けいれたとしても、そのような道徳的判断が真偽可能(truth-apt)であるか否かという点において感情主義は認知主義と非認知主義という二つの可能性にひらかれている([Jones, 2008])。プリンツは認知主義の道をえらぶ。すなわち、プリンツはここでギバードらの表出主義と手を切り、マクダウェルやウィギンズと同様に「感受性理論(sensibility theory)」を採用するのである。この論点について、プリンツは指示の理論に訴えつつ次のように説明する。「表出主義が言語化された道徳的判断[たとえば「スリは不当だ」]を感情のたんなる表出として捉える」のにたいし、わたしは「スリ」の不当さが二次性質として指示されていると考えているのである([Prinz, 2007], pp.100-101)。

では、形而上学的感情主義は感受性理論を採用することで何を主張できるようになるのだろうか。まずプリンツによれば、感受性理論は以下の利点を持っている。第一に、感受性理論は道徳的判断に感情が含まれる(affect-laden)ことを示すおびたしい数の経験的事実にうまく適合することができる。つまり認識論的感情主義と同様に、形而上学的感情主義も経験的事実にたいする説明力が高いという魅力をもつ。第二に、感受性理論はマッキーの「特異性に基づく議

論」に返答することができる。感受性理論にしたがうならば、道徳的性質は動機づける状態(motivating states)から構成されているが、他方では世界の側の特徴でもある。つまり感情的反応を引きおこし行為を動機づける力をもっているのは特定の状況であり、この状況はあくまで心の外部に存在していると考えられるのである。われわれはこのような性質を「特異なもの」とみなす必要はなく、たとえば色のような二次性質と類比的に承認することができるだろう。第三に、感受性理論は直観主義と同様に(1)基本的価値の複数性、(2)基本的価値の直観的性格、(3)道徳的判断の自己正当化といった論点に対応しうる。しかもプリンツによれば、感受性理論にとって「直観」は自分の情動を反省するようなあたりさわりのない能力に過ぎないため、直観主義が陥る形而上学的・認識論的難問を避けて通ることができるという([Prinz, 2007], pp.87-88)。

しかし、たとえ道徳的性質を二次性質との類比によって世界の側に位置付けることができたとしても、それが結局のところわれわれの感情的反応に依存しているという想定は変わらない。そしてこのことから、いわゆる「道徳的判断の誤謬可能性」という問題が帰結する——道徳的性質がそれぞれの判断主体の、それぞれの時点において抱くような感情によって表象されているのならば、いかなる道徳的判断も誤りえなくなってしまうのではないか([Prinz, 2006], p.35)。なるほど、この問題にたいする返答は「新感情主義」とよばれるタイプの感情主義によってすでに与えられていた。本論の冒頭で言及したように、新感情主義とは「道徳的判断とはたんなる情動の表出ではなく、ある行為へ応答するにあたって、ある特定の情動を感じるものが規範的に妥当だと判断する」

立場である([Nichols, 2008])。したがって新感情主義の立場からすると、スリという行為が不当であるのは、その行為にたいして主体が否認の感情を抱いたというだけでは十分ではない。判断主体はそのような否認の感情を規範的に認証することによって、はじめてスリという行為に「不当さ」の道徳的性質を表象する。つまり、新感情主義は道徳的判断における感情の相対的な性格を乗り越えるために、「ある感情が規範的に妥当である」という「メタ認知的な認証」を想定しているのである([Prinz, 2006], p.35)。

他方、プリンツはこのような新感情主義を退ける。この点においてプリンツはマクダウェルやウィギンズよりも、むしろニコルスらと同様の「シンプルな感情主義」に立つ。上述した問題にたいするプリンツ自身の返答は次節に委ねるとして、ここでは新感情主義にたいするプリンツの批判的態度を検討しておこう。おそらく新感情主義を退けるひとつの理由をなしているのは、心理学における道徳的／慣習的区別(moral/conventional distinction)をめぐる研究である。第一に、たとえばスメタナらの研究は、われわれがすでに三歳児の頃から慣習的違反(「手を挙げないとしゃべっちゃだめ」)が道徳的違反(「誰かをぶつてはだめ」)とは異なることに気がついており、前者のみが何らかの権威に左右されることを認識してことを明らかにしている([Smetana and Braeges, 1990])。第二に、たとえばウィンクラーらの実験では、被験者の子どもたちは道徳的違反をおかした二人(ひとりニコニコで、もうひとは悲しそう)の画像を示され、それぞれがどのくらい「悪い」かを尋ねられる。すると四歳児のほとんどが画像の二人を同じくらい悪いと判断した一方、六歳児の過半数が、そして八歳児のほ

とんどがニコニコのひとのほうがより「悪い」と判断したという。この結果にしたがうならば、ある状況にたいして罪悪感が妥当な感情的反応であるかどうかを規範的に評価する能力を、三歳や四歳そこらの子どもが持っていることはありそうもない([Nunner-Winkler & Sodian, 1988])。

以上の心理学的知見から、プリンツやニコルスのようなシンプルな感情主義者は、(1)道徳的判断を下す能力は幼児期から老齢期まで持続的に認められること、(2)他方、新感情主義の主張するような認知的能力を有している主体は限定的であることを主張する。その上で、シンプルな感情主義は(2)で問われている認知的能力の前提をむしろ撤廃することで、(1)で示されている道徳的判断のありかたに適合した理論を構築しようとするのである。ここまでの議論をまとめたい。本論はプリンツの感情主義のもうひとつの側面として形而上学的感情主義を検討してきた。それは道徳的性質と感情的反応のあいだに本質的な結びつきを認める主張である。そしてプリンツは形而上学的感情主義の内実として、感受性理論とシンプルな感情主義を両立させるような理論を構想している。

2.2 道徳的概念、道徳的感情、道徳的性質

では、プリンツはシンプルな感情主義の立場から「反応依存性テーゼ」に伴われるさまざまな問題にどのように返答するのだろうか。この返答にあたり、[Prinz, 2006]ならびに[Prinz, 2007]においてもっとも重要な役割を果たしているのは「情動(emotion)」と「感情(sentiment)」の区別である。二つの言葉は必ずしも明確に使われているわけではないが、本論は次のような観点からそ

の概要をつかんでおきたい。まずおおまかに言えば、感情は「情動的傾向性 (emotional disposition)」という仕方で理解される。プリンツによれば、「正当」あるいは「不当」といった道徳的概念は「是認」あるいは「否認」といった道徳的感情から構成されているが、道徳的感情そのものはさまざまな諸情動の傾向性として捉えられるのである。たとえば誰かに暴力をふるわれたとき、わたしの心のなかには質的に異なるさまざまな否定的情動が喚起され、また暴力の程度に応じてさまざまな強度の否定的情動が認められる。もちろん、否定的な情動であればすぐさま道徳的感情に結びつくわけではない。この点についてプリンツは心理学のCADモデル等を援用しつつ、否認(あるいは是認)の感情に包括されるような情動の範囲を「否認(あるいは是認)のスペクトル」として示している(否認の感情に含まれる情動としては、たとえば「怒り」、「嫌悪」、「罪悪感」、「恥」が挙げられる)([Prinz, 2007], p.79)。したがって、暴力をくわえられたときにわたしに生じている情動がこの「スペクトル」のなかに含まれないならば(たとえばわたしが安らぎを感じているならば)、少なくともわたしにとって暴力は「不当さ」という道徳的性質をもった行為として表象されないことになる。またプリンツの記述では、情動と感情は時間軸にしたがった区別が引かれることもある。その基本的なアイデアは、基本的な道徳的価値が個々の「情動」ではなく、特定の種類の行為にたいする長期的な記憶と結びついた「感情」から成り立っているというものである。たとえば、わたしが「スリは不当だ」という道徳的判断を下す場合を考えてみよう。上述の説明と考えあわせるならば、わたしはそのような道徳的判断を下すとき、かりに自分がスリをしたなら

ば「罪悪感」や「恥」を感じるような、またかりに誰かがスリをしたならば「怒り」や「嫌悪」を感じるような、そのような傾向性をもつ記憶表象を抱えていることになる。そしてあなたがじっさいにスリをしているのを見てわたしが「それは不当だ」と発話するとき、「不当」という言葉はわたしのその時点での怒りの状態を表出(express)しており、それは長期の記憶表象を含むわたしの情動的傾向性の表明(manifestation)ともなるのである([Prinz, 2007], pp.96-97)。

プリンツによれば、感情主義者は以上のような観点から「反応依存性テーゼ」の難問に答えることができるという。第一に、われわれは何らかの道徳的確信を抱くために必ずしも個々の情動を表出する必要はない。わたしは「性差別はいけないよね」と判断するときつねに怒りにうち震えていなくても、ひとまず性差別という事態にたいする否認の傾向性を持ってさえいればよい。このことは前節の認識論的感情主義において問題にされた「冷めた道徳的判断」にたいする新たな説明を与えてくれるだろう。第二に、道徳的判断が誤謬可能性をもっていることを説明することもできる。たとえば、わたしはこれまで「裏切り」というタイプの行為にたいして否定的な感情の指針(sentimental policy)を抱いているとしよう。しかし、ときにはある個別的な行為が誤って「裏切り」のタイプの事例とみなされ、結果として否定的な情動が喚起されてしまうかもしれない([Prinz, 2006], p.35)。このような誤謬可能性は、裏切りにたいする情動の傾向性が長期的に記憶され、ひとつの「指針」として安定しているから確保されているのである。

また、情動と感情の区別は感情主義にとってより大きなプロジェクト、すな

わち感受性理論とシンプルな感情主義の両立という構想に役割を果たすものでもある。このことは情動という言葉がどのような状態として理解されているかを考察してみれば明らかになるだろう。プリンツによれば、情動とは結局のところ「パターン化された身体変化の知覚(perceptions of patterned changes in body)」に過ぎない([Prinz, 2007], p.94)。そしてプリンツは、通常の知覚経験において対象の性質がその知覚的特徴を媒介として見出されるように、われわれは情動を媒介とすることで世界の側に位置付けられる道徳的性質と関係を持つことができると主張する。これはつまり、われわれは身体変化として知覚されるさまざまな情動を手がかりに、世界の道徳的なありようをつかみとっているという主張である。ここでは、プリンツが感情の理論においてマクダウェル流の感受性理論を採用しておきながら、情動の理論においてはむしろドレッキ流の目的論的表象主義の立場を取っていることに注意したい(このような表象理論はすでに([Prinz, 2000]で打ちだされている)。新感情主義との対比において示されたように、シンプルな感情主義はわれわれと道徳的性質のあいだの関係にいかなる認知的能力の介入も認めなかった。したがってプリンツにとって道徳的性質と道徳的概念の結びつきは、もっぱら情動を媒介とする因果的關係として理解されることになる。すなわち「道徳的概念は知覚的に基礎づけられた道徳的性質の検出子である」([ibid.]。)

ここまでの議論をまとめたい。プリンツは感情的状態を情動／感情という区別によって理解する。情動はシンプルな感情主義の枠組みにおいて身体知覚として理解され、経験的探求の場に位置付けられる。他方、感情はそうした諸情

動の傾向性として道徳的性質を表象し、その役割はむしろ感受性理論の枠組みにおいて問われることになる。

3. 道徳的主観主義

3.1 客観性なき実在論の構想

ただしここにたって、プリンツの感情主義にはいくつかのメタ倫理学上の問題が残されている。ひとつは客観性の問題である。感受性理論によって道徳的判断の真偽可能性を確保し、情動／感情の区別によって道徳的判断の誤謬可能性を説明できたとしても、道徳的判断が反応依存的であるかぎり感情主義は道徳の客観性を主張できないように思われる。この問いにたいするプリンツの態度は、一言でいえば、むしろひらきなおって主観主義を擁護することにある。以下、本論は最後にこの論点を概観しておきたい。

まず、プリンツは道徳的客観主義を批判的に検討するために、客観性なる概念を(a)不偏性(impartiality)、(b)心的独立性(mind-independence)、(c)表象的独立性(representation-independence)という観点から整理することからはじめる。たとえば、理想的観察者や反省的均衡といった想定に訴える道徳理論は(a)不偏性に、道徳的性質を自然種と類比的に捉える道徳理論や神的命令説は(b)心的独立性に、そして帰結主義や徳倫理や規約主義は(c)表象的独立性に訴えることで客観主義的立場を取ることが可能になるという。このような分類をおこなったのち、プリンツは(1)客観主義者の直観は主観主義の理論によっても説明可能であり、(2)道徳性を何らかの客観的なものに基礎づけようとする試みは困難にぶちあ

たるという二点を主張することになる([Prinz, 2007], pp.138-169)。本論では(2)にかんする検討のすべてを紹介することはできないが、さしあたりもっとも詳細な考察がくわえられている立場として、(b)の心的独立性に訴える客観主義をめぐるプリンツの議論をおさえておこう。プリンツによれば、客観主義が感情主義に突きつけてくる反論のひとつは、道徳的性質がわれわれの心的状態に依存することなく存在するという直観である。たとえば客観主義者は次のように述べることができる。「殺人がまかりとおるほど墮落した未来の世界を想像してみてほしい。その世界に生きる知的存在者が『殺すな』という道徳的規則を理解することにことごとく失敗したとしても、なお殺人は不当であるはずだ。このことは、不当さのような道徳的性質が人間心理からのある種の独立性をもっていることを示しているではないか」と([Prinz, 2007], p.148)。

他方、プリンツは感情主義の立場から次のような再反論をくわえる。第一に、心理学のいくつかの研究は必ずしも上のような客観主義的直観を支持してはいない。たとえばケリーらのおこなった実験によれば、被験者は自分たちの文化では「よっぱらった船員を船長がぶんなぐる」のような行為は許容されないが、他の文化の構成員によってなされたときは許容されうると返答する傾向にあるという([Kelly et al. 2007])。またニコルスのおこなった実験によれば、まず被験者は自分たちの文化に属するような人々と、「ただ楽しいから」という理由で無辜の人間に暴力をふるうことを容認するような文化に属する人々を想像するよう指示される。そして「いずれかひとつの集団が客観的に正しいかどうか」ならびに「いずれが正しいかという問題にかんする客観的な事実が存在するかど

うか」を尋ねられる。すると、いずれの問いにも「非客観主義者の返答」をおこなった被験者は66%にもものぼったという([Nichols, 2004])。第二に、たとえ上のような客観主義的直観を認めたとしても、感情主義は必ずしもこの直観を説明できないわけではない。というのも感受性理論を採用する感情主義は、たとえば「不当」という概念がわれわれによってもつかのところ(currently)非難されるような傾向にあるものを指示していると考えればよいからである。そうすれば、われわれは現在なされている指示の理論に基づいて、将来的に想定される墮落した世界においても、「不当」の指示する道徳的性質の存在を担保することができるだろう([Prinz, 2007], p.149)。

また、このような客観主義批判の成否はさておくとしても、プリンツは自身の主観的感情主義にもうひとつのメタ倫理的議論を与えていることにも注意したい。それは道徳的實在論をめぐる議論である。プリンツはこのトピックにあたって「實在」という言葉の使用を整理することからはじめている。その整理によると、伝統的に實在論は(1)真理性、(2)事実性、(3)因果性という三つの観点から構築されてきた。そして感情主義はその形而上学的側面において感受性理論を採用することによって、いずれの観点にも合致する仕方でも實在論を主張することができるというのである。まず感受性理論は表出主義とは違って道徳的判断が反応依存的な性質を支持していると考えており、真偽判断が可能(truth-apt)である。続いて感受性理論を採用するならば、ある状況(たとえば「盗み」のような行為)がわれわれに特定の反応(たとえば「怒り」とか「罪悪感」)を引き起こすのは事実であるという説明が可能になる。最後にこのような構図

を受け入れるならば、感情主義は情動誘発的な性質とわれわれの情動のあいだ、あるいはわれわれの情動とわれわれの行為のあいだに因果的連関を認めることができる。したがって、プリンツは以下のように結論を下す。「もし何かが実在するためには客観的でなければならないのならば、われわれは反実在論者になるべきだろう。しかし[上述の理由から]、わたしの提唱する主観主義は道徳的実在論のひとつの形式とみなしてよい」 ([Prinz, 2007], p.168)。

3.2 対立することと共有されること——むすびにかえて

以上、いささか性急な足どりではあったけれども、本論はプリンツの感情主義のメタ倫理学上の係争点を考察してきた。最後に一節から三節までの議論をもういちど回顧しておこう。まずプリンツの認識論的感情主義は、近年のさまざまな経験的事実に適合するような説明能力をもったものとして擁護された。形而上学的感情主義によれば、その内実は感受性理論とシンプルな感情主義の合わせ技ともいうべき構想によって示される。そしてこのような構想からは「客観性なき実在論」が帰結することになる。

しかし、感情主義が感受性理論の恩恵によって一種の実在論にコミットすることを認めるとしても、多くの規範倫理学者はプリンツの主張にきわめて破壊的な相対主義を指摘することになるだろう。たしかに、プリンツは情動／感情の区別に訴えることで感情によって表象される道徳的性質に何らかの安定性を与えようとしている。だが「傾向性」や「長期的記憶」を持ちこんだところで、感情が行為者相対的な性格であることに変わりはない。プリンツの議論に含ま

れる奇妙さは、たとえばわたしとあなたが同一の行為にたいして異なる感情を抱いているという状況を想定してみれば明らかだろう。それはわれわれが日常的に経験しうるような状況だが、そこでは同じ行為に異なる道徳的性質が貼りつけられており、しかも、それらがある種の実在性をもっていると想定されなければならないのである。そしてこうした奇妙さは、プリンツがいくつかの局面において言及している「道徳的発展(moral progress)」によっても軽減されるわけではない。プリンツによれば、われわれは道徳的価値体系の衝突を道徳性の内部において解消することはできないが、各々の体系を整合性や安定性、系譜学的方法といった道徳外の価値によって「改定」することはできるのだという([Prinz, 2007], pp.288-308)。しかしプリンツ自身が述べているように、感情主義はこのような道徳外の領域においても非相対的な価値を規定することはなく、「道徳的発展はあくまで相対主義者の枠組みのなかで理解可能である」([Prinz, 2007], p.303)。とするとジョイスの指摘するとおり、プリンツは結局のところ終始相対主義に徹しているのであり、いかなる価値体系にも共有されるような道徳的価値があるという直観を感情主義は救うことができないことになる([Joice, 2007])。

このようなすれ違いは、プリンツが前節の(c)表象的独立性としての客観主義を退けたときすでに予告されていたとも言えるだろう。プリンツの整理によれば、帰結主義者やカント主義者のいくらか(おそらくはレイルトン流の功利主義者やウッド流の实在論的カント主義者)は「通常のわれわれが抱いている道徳的価値を捨て、それらを各々の基本的価値に置き換えようとする」という。そし

てプリンツは、そのような「改定主義的客観主義」と「自分の理論が競合するものではない」ことを認めながらも、改定主義的客観主義者の側が「われわれの道徳的な言葉が意味していることがらについてのよき説明を与えることはできない」ことを指摘している([Prinz, 2007], pp.168)。しかしジョイスのような立場からすれば、「われわれの道徳的な言葉が意味していることがらについてのよき説明」を、「いかなる価値体系にも共有されるような道徳的価値があるという直観」に優先させなければならない説得的な理由は、どこにも見当たらないのである。

他方、プリンツの感情主義は哲学的メタ倫理と多くを共有するものでもある。プリンツの基本的なアイデアを繰り返すと、それは道徳的概念と道徳的性質のあいだに意味論的關係を主張しながら、その関係そのものを情動というリアルな身体知覚によって基礎づけようとするものだった。こうしたアイデアは「傾向性」や「長期的な記憶」のような(意地悪な見方をすれば)都合のよい概念に支えられており、前述したような問題をたしかに含んでいるかもしれない。だが肯定的に捉えるならば、この構図はこれまで切り離されてきたシンプルな感情主義と感受性理論の両立可能性を示すことにある程度の成功をおさめていると言ってよい。あるいはプリンツの感情主義の主張は、たとえば「理由の空間」のような哲学のレトリックによって支えられていた感受性理論を、経験科学との接続を可能にするような仕方によって組みなおそうとする魅力をもつ理論としても評価できるだろう。また、ジョーンズとの論争で明らかにされているように、プリンツの主張は経験科学とメタ倫理学の双方向の交流が、少なくとも

道徳的概念の意味論的課題や、その使用条件の問題に際して要求されることを示唆するものでもある([Jones, 2006])。このように、プリンツは主観主義を打ち出すことによって挑発的な議論をおこなっているが、他方では冒頭で述べた「自然主義的感情主義」と「哲学的感情主義」の対立を解消するようなアイデアも与えてくれている。本論はこれらのアイデアの可能性をこれ以上検討することはできないが、少なくともその具体的な手がかりのいくばくかは提示することができただろう。

参考文献

- Blair, R. J. R. [1995] “A cognitive developmental approach to morality: Investigating the psychopath”, *Cognition* 57: 1–29.
- Blair, R. J. R., E. Colledge, L. Murray, and D. G. V. Mitchell [2001] “A selective impairment in the processing of sad and fearful expressions in children with psychopathic tendencies”, *Journal of Abnormal Child Psychology* 29: 491–498.
- Blair, R. J. R., D. G. V. Mitchell, R. A. Richell, S. Kelly, A. Leonard, C. Newman, and S. K. Scott [2002] “Turning a deaf ear to fear: Impaired recognition of vocal affect in psychopathic individuals”, *Journal of Abnormal Psychology* 111: 682–686.
- Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E. *et al* [2001] “An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment”, *Science* 293: 2105–2108.

- Greene, J. D., Nystrom, L. E., Engell, A. D. *et al* [2004] “The neural bases of cognitive conflict and control in moral judgment”, *Neuron* 44: 389-400.
- Greene, J. [2008] “The secret joke of Kant’s soul”, in *Moral Psychology. Vol. 3: The Neuroscience of Morality*, ed. W. Sinnott-Armstrong. Cambridge, MA: MIT Press.
- Haidt, J. [2001] “The emotional dog and its rational tail: a social intuitionist approach to moral judgment”, *Psychological Review* 108: 814-834.
- Haidt, J., & Bjorklund, F. [2008] “Social intuitionists reason, as a normal part of conversation”, in *Moral Psychology. Vol. 2: The Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity*, ed. W. Sinnott-Armstrong. Cambridge, MA: MIT Press.
- Haidt, J., Bjorklund, F., & Murphy, S. [in preparation] Moral dumbfounding: When intuition finds no reason.
- Hoffman, M. L. [1983] “Affective and cognitive processes in moral internalization”, in *Social cognition and social development: A sociocultural perspective*, edited by E. T. Higgins, D. N. Ruble, and W. W. Hartup. Cambridge: Cambridge University Press: 236-274.
- Jones, K. [2006] “Metaethics and Emotions Research: A Response to Prinz”, *Philosophical Explorations: An International Journal for the Philosophy of Mind and Action* 9 (1): 45-53.
- Joyce, R. [2009] “Moral relativists gone wild: Review of Jesse Prinz’s *The Emotional Construction of Morals*”, *Mind* 118 (470): 508-518.

- 蟹池陽一 [2008] 「道徳的判断と感情との関係—fMRI 実験研究の知見より」、
信原幸弘・原塑『脳神経倫理学の展望』、勁草書房。283-314 頁
- Kelly, D., Stich, S., Haley, K., Eng, S., and Fessler, D. [2007] “Harm, Affect, and the
Moral/Conventional Distinction”, *Mind and Language*, 22: 117-131.
- Moll J., de Oliveira Souza R., and P. J. Eslinger [2003] “Morals and the human brain:
A working model”, *Neuroreport* 14: 299–305.
- Moll J., de Oliveira Souza R. [2007] “Moral judgments, emotions and utilitarian brain”,
Trends in Cognitive Sciences 8: 319-321.
- Nichols, S. [2004] “After objectivity: an Empirical Study of Moral Judgment”,
Philosophical Psychology, 17: 5-28.
- Nichols, S. [2008] “Sentimentalism Naturalized”, in *Moral Psychology. Vol. 2: The
Cognitive Science of Morality: Intuition and Diversity*, ed. W.
Sinnott-Armstrong. Cambridge, MA: MIT Press.
- Nunner-Winkler, G. and B Sodian [1988] “Children’s Understanding of Moral
Emotions”, *Child Development*, 59: 1323-1338.
- Prinz, J. J. [2000] “The Duality of Content”, *Philosophical Studies*, 100: 1-34.
- Prinz, J. J. [2002] *Furnishing the Mind: Concepts and Their Perceptual Basis*,
Cambridge, MA: MIT Press.
- Prinz, J. J. [2004] *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*, New York, NY:
Oxford University Press.
- Prinz, J. J. [2006] "The Emotional Basis of Moral Judgments", *Philosophical*

Explorations 9: 29-43.

Prinz, J. J. [2007] *The Emotional Construction of Morals*, Oxford University Press.

Prinz, J. J. and Nichols S. [2010] “Moral Emotions”, in J. Doris and the Moral Psychology Research Group (Eds.), *The Moral Psychology Handbook*, Oxford University Press .

Sanfey, A. G., J. K. Rilling, J. A. Aronson, L. E. Nystrom and J. D. Cohen [1999] “The neural basis of economic decision-making in the ultimatum game”, *Science* 300: 1755–1758.

Schnall, S., Haidt, J., Clore, G., & Jordan, A. [2008] “Disgust as embodied moral judgment”, *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34: 1096-1109.

Slote, M. [2010] *Moral Sentimentalism*, Oxford University Press.

Smetana, J. and J. Braeges [1990] “The Development of Toddlers’ Moral and Conventional Judgements”, *Merrill-Palmer Quarterly*, 36: 329-346.

Wheatley, T., & Haidt, J. [2005] “Hypnotic disgust makes moral judgments more severe”, *Psychological Science*, 16: 780-784.

付記: 本稿は、平成 22 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

(ながもり のぶとし 京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程

／日本学術振興会 特別研究員)